

ハッピーエンドの作り方(1) ~sideY~

姫川乃愛

ただ一度の過ちだ。

そう一言に纏めてしまうのは簡単だ。事実その通りなのだし、周囲の認識もそうなのだから。

けれど自分がかたくなにそれを拒んだ。認めてしまうことは、ひどく簡単な手段ではあるが、同時にひどく卑怯で後ろ向きな逃げ道でもあるのだと、頭のどこかで分かっていたからだと思う。「過ち」というありきたりな言葉にしてしまうことで、自分の犯した罪までもがありがたくなってしまうこと、自分の犯した罪までもがありがたくなってしまうのではないかと恐れた。意固地な自分は、現実を認め、受け容れることができなかったのだ。

\* \* \* \*

今の時間にたどり着くまでに通過してきた、いくつかの分かれ道。自分はどこで間違えてしまったのだろう。その問いかけに意味はなく、おそらく、後になって思い返す必

要に迫られるようなことは何もなかった。それほどまでに何もかもを間違え、間違えたことに気づかぬまま、ここまで来てしまったのだろう。

一つ目の分かれ道は、同僚や家族に内緒で通っていたシヨットバー。普段ならばすれ違い気にも留めなかったであろう存在に、僅かな間目を留めたことだった。綺麗な顔をしているのにどこか野蛮なところのある顔立ちと、すつきりと整えられた短く黒い髪が、記憶の奥底に眠っていた一人の女性をかすかに、本当にかすかに思い起こさせた。

二つ目の分かれ道は、そのバーの出口を潜り抜けた時に、あらぬ方向から腕を引かれたこと。微笑をたたえた扇情的な表情と、奥へと誘い込むような指先の動きに、自分も無言のままに応えたこと。ぎりぎりまで照明が落とされた店内で、ほんの一瞬だけ注がれた視線をよく正確に感じ取ったものだと、誘いに乗ったのはそんな単純な好奇心からだった。

行きずりの女の腹の上で、秘めた名前を呼ぶような真似は、さすがにしなかった。しかし明かり一つない深い暗闇はひたすらにありがたく、閉じられた闇の中、滑らかで温

かな女の肌に、胸に想う姿を重ね続けた。

背に回された女の腕の、その細かったことを、今でもくつきりと思いつける。

身代わりにした。遂げられなかった想いの捌け口にした。自分も彼女もあまりに幼く、恋心を抱くことに羞恥すら感じていた当時の。

三つ目の分かれ道は、崩壊の始まりだった。

『お帰りなさい、祐樹さ……』

玄関で自分を出迎える妻の顔に広がりかけた笑みが、不自然に硬直し、

『香水の……匂いが』

今ではもう、何もかもがずいぶん昔の出来事に思えて仕方がない。

\* \* \* \*

いつだったか、初恋の人は誰？ と友人に尋ねられた時、自分は、神代梨沙子、と答えていた。その名前に意味はなく、いつ出会った相手なのか、顔は可愛かったか、彼女と

はその後どうなったのか、といった情報を相手が訊きたがっていたことは無論分かっていた。分かっていたが、言わずにはいられなかった。そして同時に、友人にそれ以上詳細なことを語る気にはなれなかった。

神代梨沙子。

彼女とは、小学校で出会った。小さな自分たちのために何もかもが小さくしつらえられた、退屈な、閉じられた箱。

入学した当初は物珍しく感じられた小学校生活も、一年もすればすっかり飽きてしまい、三年目の自分は図書室にこもって本ばかり読んでいた。神代梨沙子の転入は、その年の秋のことだった。

『神代梨沙子です』

ぶすつとした顔でそう言い切ったとき、転校生は黙ってしまった。綺麗な顔をしているが、きつそうな子だというのが、自分の彼女に対する第一印象だった。クラスメイト全員が同じ考えだったようで、転校生の彼女がクラスで孤立するまでに、時間はさほどかからなかった。

図書室でだけ、彼女はよくしゃべった。まるで魔法がかかったように、教室での刺々しい雰囲気、図書室では緩

和されるのだ。その事実を知っていたのは自分だけだった。

『祐樹くん、祐樹くん、本を読もう』

『梨沙子、この本が好きなの。とつても面白いんだよ！

祐樹くんも読んでみて』

『祐樹くんの好きな本を教えて。梨沙子、祐樹くんの好きなものを知りたいの』

昼休みと放課後の図書室で、自分たちはたくさんの話をした。神代梨沙子がかなりの本好きで、特にファンタジーが好きであること。小説家を目指していて、ノートに小説を書いていること。彼女が当時書いていた小説に登場する——彼女の言葉を借りるなら、「気弱だけれどイケメンで周囲の人々から愛されている」——主人公のことも、自分は図書室で教わった。

『特別よ』

物語を語る時、彼女はしばしばそう言った。それはとても快い響きで、彼女がそう口にするたび、自分はとてもうれしくなった。

『ねえ、祐樹くん。祐樹くんは私のことが好き？』

ときどき、思い出したように彼女は自分にそう尋ねた。

いたずらっぽい笑みと、からかうような口調で。

『ねーえ。祐樹くんってば』

彼女の笑う声は、まるで綿菓子のように軽やかに自分の耳に響き、恥ずかしくなった自分はいつむいて黙ってしまった。それを彼女がまたからかう。自分は耳まで赤くなる。そんな時の彼女はとても愉しそうだつた。

そんなことばかり、繰り返していたように思う。宝石のような瞬間の積み重ね。あのまま永遠に続くと思われた時間。それは中学生の終わりまで続き、唐突に終わりを告げた。

『え……転校？』

『うん。お父さんの転勤で、県外の高校に行かなきゃいけないの』

うつむいた顔に前髪がかかって、彼女の細かい表情はうかがえなかった。出逢ってからそれまでの六年半で、彼女はさらに美しく成長していた。彼女は美しく、しかしいつも孤独だった。

『私、祐樹くんと離れたくない。でも、どうすることもできない……』

震える細い肩。彼女が泣いているのが分かった。その軀を力いっぱい抱きしめたい衝動を、自分は必死に抑えた。もしもそうしたら、その瞬間に何かが壊れてしまう気がした。

夕暮れの図書室で、自分たちはただ黙って大量の本たちと立っていた。それがすべてだ。

自分の神代梨沙子に対する気持ちがあつたと悟つたのは、それからずいぶん経ってからのことだった。

\*・\*・\*

たつぷり残業して家に帰る習慣がついたのはここ数週間の間だったはずだが、もう何年も前からそうしていたよ  
うな気がする。妻が「ああなつてしまった」後も、娘を妻の両親に預けるまでの間は、娘の世話をするため、自分はきちんと定時に職場を出て、この家に帰ってきていたはずなのに。

暗闇の中、手探りで鍵を開ける。玄関の電気はセンサーで人を感知して自動で明るくなってくれるはずだが、肝心

の電球が切れていて何の役にも立たない。開いたドアの先に感じる人の気配は、扉をくぐり、三和土を踏み越えるといつそう鮮明になった。踏み越える時に視界の端を流れた小さな靴が、その気配が自分の勘違いではないことを自分に知らせ、耐え難い居心地の悪さが増す。

「だーれえ？」

廊下の奥深くまでみっちり詰り込まれていた闇を掻き分け、ダイニングへ続く扉を開くと、少女のようなあどけない声が自分に問いかけた。遮光カーテンが開かれたダイニングは外の明かりを取り込んでぼんやりと明るく、椅子に浅く腰掛けテーブルに突っ伏す小さな人影を黒く浮かび上がらせていた。廊下の方がよほど闇が濃い。

「真つ暗でえ、何にも見えないのよー。おとーさん？ あ、分かったおねーちゃんだー」

ひそやかな笑い声。底抜けに明るく、それゆえに中身の無い悲しいほどに空っぽな声。

ああ、また。

「陶子……」

唇から洩れた声は、妻の名を呼ぶものとは思えないほど

に乾き切り、ひび割れていた。陶子はひとしきりしゃべって満足したのか、自分の呼びかけには答えない。自分が近づくと彼女の唇の間から小さく吐息が漏れ、続いてそれよりはいくらか大きなうめき声が、低く空気を震わせた。その拍子に蜂蜜を煮詰めたような濃厚な甘い匂いが彼女の躰から立ちのぼり、自分は思わず顔をしかめる。

「陶子、酒を飲むのはやめなさい」

「……やあーよ」

返事を期待せずに放った言葉。陶子が背を向けたまま答えたので、彼女の頬に触れていた指先が硬直する。彼女がその指を振り払うように上体を起こし、暗闇の中、向かい合った瞳がゆつくりと開く。自分がまだ父親や姉に見えているのだろう。幸福そうに細められた視線は、自分を突き抜けてさらに後ろに向けられているように感じた。

「学生のころはねえ、お酒でいろんなことを忘れられるって思ってたのよお。でも、なんか頭がぼわぼわするだけだえ、全然だめだったの……」

陶子はそのまま語りかけるようにも、独り言のようにも聞こえる声で呟く。

「やめなさい。飲めないくせに無理に飲むと体を悪くするよ」

「うるさいよう！ 私の好きにしたっていいでしょお！」  
前触れもなく振り上げられた手。尖った硬い爪が頬を引っ掻き、焼けつく熱さで自分は皮膚が裂かれたことを知った。

「だって匂いがするのよお！ 消したいのにどうしたって消えないの！ あんな濃くて甘い匂い、祐樹さんから香水の、」

甲高い声が自分の胸を突き壊す前に、噛みつくように口づけた。ぴつたりと閉じられた唇の奥で、空気を切り裂くような悲鳴が弾ける。蜂蜜を煮詰めたような酒の匂いと甘みが喉を焼き、熱い滴が頬を走る一筋の傷にじくじくと沁みた。

陶子のことは愛していた。たとえ誰も信じなくても。あんなことを起こしておいて、矛盾しているのは分かっている。けれど自分はその一夜限りの女を愛してはいなかった。彼女と結婚したいとは思わなかった。初恋の女と似ていたけれど、そしてそれは彼女を性欲の対象にまでは引き上げ

たけれど、それでも。

どこで間違えてしまったのだろう。

今までは自分が人生に間違えているなどと思ったことはなかった。大人になってからは、そういうことを立ち止まって考える暇もなかった。何もかもが目まぐるしく流れていって、それはきつとこれからもずっと変わらないと思っていた。

腕の中で泣きじゃくっていた陶子は、いつの間にか眠っていた。その頬が血の色を燃え立たせているのが目に入り、それを知覚できることで自分は夜が明けたことによく気がつく。彼女を寢室に連れて行く時、抱き上げた彼女の体が空気のように軽くて、泣きそうになった。彼女が痩せてしまったのが悲しかったわけではない。心の中で受け止めたその存在が、両腕で受け止めた軽さとは裏腹にずしりと重く感じられたことが、ただただ悲しかったのだ。

\* \* \* \*

中学三年生の時、「将来の夢」という主題で作文を書か

された。ちょうど進路希望の調査をとる時期と重なっていたこともあり、その時自分は人生というものに初めて向き合うこととなった。

自分には将来の夢がなかった。野球選手になろうとか、警察官になろうとか考えたこともなかった。

『祐樹は将来何になりたいんだ？』

それまでも、父や小学校の担任が自分にそう口にすることはたびたびあった。そのつど自分はかなり適当なことを言ってお茶を濁していた気がする。

彼らが口にする言葉の一つ一つが妙に煩わしく、無性に腹が立った。その怒りは彼らに向けられたものではなく、質問にきっぱりと答えられない自分自身に向けられたものだった。幼かった自分には、将来や人生といった言葉がずいぶんときらきらしているもののように思えた。夢を語る級友を冷めた目——中学生のころは、「本気になる」のは格好悪いというような風潮があったものだ——で見ながらも、心の内ではうらやましく感じた。そういった場面に遭遇した後に来るのはきまって、口先だけの夢を語る自分に対するみじめさだった。自分も級友に作り物ではない

本物の夢を語りたかった。

だから中学校三年生の時、自分はずいぶんと真剣にその課題と向き合ったものだ。自分の将来、存在理由、生まれしてきた意味……そんな難しいことを何時間も考えたりもした。はたから見れば随分と滑稽に思えたかもしれない。しかし自分には切実だったし、あのころは毎日生きるのに必死だった。自室のベッドの上でも、教室の中でも、神代梨沙子の前でさえ、その問題は頭の中をちらついていた。ちらちらと尻尾を見せては、自分の意識を持っていった。

大人になった自分の姿を想像しようと試みても、今の自分の背が伸びた姿しか思い描けず、肝心の職業や未来の家族像などはまるで考えられなかった。特にこれと決まったものがないのだから当然だ。ただなんとなく、普通の会社員にはなりたくないと思っていた。サラリーマンとは随分と後ろ向きな夢だと当時の自分は感じた。語る資格など無いように。けれど他に自分のなれそうなものが何も思い浮かばず、結局自分の学力に合っている——と担任が勧める——高校への進学を希望した。

そういえば、悩んだことの記憶は鮮明に脳裏に刻まれて

いるが、結局あのころの自分の夢とはいったいなんだったのだろうか？ 当時の作文に書いたことは、全く思い出せない。

\*・\*・\*

妻とは大学のサークルで出会った。神代梨沙子の真似をして小説を書くようになっていた自分の前に現れた、一つ歳下の後輩。自分はあまり新入生の勧誘に熱心ではなかったので、彼女と初めて顔を合わせたのは新入部員の歓迎会においてだった。

『宮坂陶子です』

ぺこりとお辞儀をした拍子に、ふわふわの長い髪が揺れた。あまり女性に興味がなかった自分でも、かわいらしい子だと感じた。そして神代梨沙子と違って、にこにこしている感じのよい子だ、とも。

それでも当時は、自分が彼女と結婚するなどは夢にも思わなかった。自分は神代梨沙子、もしくは彼女に似た女と結婚するものだと思い込んでいた。宮坂陶子は神代梨沙

子に比べてあまりに明るく、誰にでも平等すぎた。そしてそれは自分のような卑屈な男の目には偽善としか映らなかった。

そんな彼女が、なぜ自分のような男に興味を持ったのかは分からない。

『小さな幸せをひとつひとつ寄せ集めているうちに、気づいたら、恋になっていたんです』

付き合い始めたばかりのころに一度、彼女はそんなふうと言った。その日はびかびかの上天気で、自分たちはだだっ広いキャンパスのベンチに並んで腰かけていた。昼食時だったため、自分はコンビニのカツサンドを齧り、陶子は手製の弁当を膝にのせていた。

『はいっ、先輩。あーん』

弁当箱の中から鮮やかな赤いウインナー——タコのかたちに切り込みが入れられ、目の位置にはご丁寧にゴマもついていた——をつまんで、こちらに差し出す彼女に、自分でも滑稽なほどたじろいだことを、よく覚えている。

\* \* \* \*

小学生の時も中学生の時も、自分と神代梨沙子が図書室の外で話すことはほとんどなかった。教室では彼女は自分がだれと話していても我関せずといった感じで本を読んだり宿題をしたりしていたし、自分は自分でいつも一人の彼女を知らんぷりしていた。クラスが違えば図書室以外で顔を合わせることもほとんどなかった。たとえ同じクラスで彼女と席が近くになっても、自分は何も感じていないし気にしていない、というふうを装った。その状況を奇妙だとは感じなかった。自分の中で神代梨沙子という人間は図書室の中にしか存在しない人物だった。教室でクラスメイトとの間に壁を作っている神代梨沙子を、自分はまるで別人のように感じていた。

しかしそんな生活の中で一度だけ、図書室以外で出会った神代梨沙子が深く印象に刻まれたことがある。

小学校最後の夏休みだった。頭上に降り注ぐ日差しは言うに及ばず、アスファルトから照り返しまでもが、情け容赦なく自分の皮膚を焼いた。ニュースでは気象予報士が今年一番の暑さを伝えていた。どうしてこうも暑いのだろう



と、塾の夏期講習へ向かう道すがら、自分は空を睨みながら歩いていった。

家から塾までの距離は子供の足で歩いて一五分ほど。民家と畑を除けば、間にあるのは小さな神社だけだ。神代梨沙子はその神社の古ぼけた鳥居の脇にしゃがみ込んでいた。普段なら通過するだけのその場所で自分が足を止めたのは、赤い鳥居の傍にあっさりした白いワンピースを着た彼女の取り合わせが奇妙だったからだ。彼女は相変わらずのショートカットだったが、髪にカラフルなピン——私たちの小学校では、髪留めの色は黒か紺か茶と決まっていた——をいくつか留めているのが、少し離れたところからでも分かった。

神代梨沙子のもとに駆け寄って行って声をかけるのはためらわれた。特に何かを示し合わせたわけではないのに、図書室以外の場所では、自分は彼女に声をかけてはいけない気がしていたのだ。そしてそれで何の不都合もなかった。自分が図書室の外にいる彼女に興味を持つことはほとんどなかった。しかしその時の自分は妙に彼女が気になり、物陰からこっそりと様子をうかがうことにした。

神代梨沙子が熱心に観察しているのは、蟬の脱皮らしかった。一匹の蟬が、鳥居の柱にしがみついて硬い殻の中から成虫となった軀を外に出そうとしているのだ。薄い茶色の抜け殻から柔らかそうな出来立ての蟬の軀が現れ、それは羽を伸ばすために殻のすぐそばに止まった。

その時だ。それまでまるで死んだように動かなかった神代梨沙子が動いた。彼女は先ほど脱皮を終えたばかりの蟬の成虫に右手を伸ばし、おもむろにそれを鳥居から引きはがした。右手の親指と人差し指とで挟んだそれをしげしげと眺めた後、空いていた左手で、まだくしゃくしゃの羽をむしり取る。そして羽を喪った蟬を地に置いて、また石のように動かなくなった。

いつのまにか、神代梨沙子に声をかけようかどうしようかというためらいは消えていた。自分は物陰から出て、彼女に見つからないように細心の注意を払って塾へと向かった。後日図書室で彼女に会った時も、自分はそのことを話さなかった。夏が終わって秋になっても、小学校を卒業しても、中学生になっても、自分はあの日目撃した出来事を黙っていた。

不思議と、彼女を怖いだとか、気持ち悪いだとかいうふうには思わなかった。それは彼女が残忍な笑みなどではなく、本当に生き生きとした愉しそうな表情で蟬を見ていたからだ。まるで蟬と一緒に遊んででもいるかのように。まるで図書室で自分に物語を語る時のように。自分はその彼女を喪いたくなかったのだ。

大学を卒業してから一度だけ、自分の生家があった場所を訪ねる機会があり、あの神社の前を通りかかった。数年前に季節外れの嵐があり、鳥居が倒れたらしい。新たに建てられた真新しい鳥居は凹凸がなく滑らかで、蟬が脱皮するのには向かない気がした。

\*・\*・\*

陶子は、初恋の人を憶えていない。本人がそう言っていた。

彼女と自分が大学生だったころ、自分たちは彼女の家でよく話をした。学園都市とは名ばかりの森林と池に囲まれた土地には若者が遊ぶような場所は少なく、電車で三十分

近くかかる県庁所在地に出ていくには、自分たちには時間も金も不足していた。自分も彼女も下宿生だったので、誰に気兼ねすることもなくお互いの家に入りにできたのだ。

『初恋？』

ベッドの中、二人で毛布にくるまりながらの会話。狭い空間に手足が八本もあって窮屈で、しかしその代わり、どう動いても確かな温もりがそばにあった。

『そう。どんなだった？』

『んー……。よく憶えてないなあ。幼稚園の時だったと思うけど』

唇に指を当てて考える仕草をしながら、陶子はそう断じた。

本当に何も憶えていない様子だった。好きになった理由も、相手の名前さえ。彼女の記憶にある最初の恋は、実体のないただの記号だった。若かった自分はそれを不幸なことだと思ったものだ。狭いシングルベッドの上、豆電球のほのかな橙色に片腕を透かし、もう一方の腕で陶子の頭を支えてやりながら。

しかし今では分からない。なにもかも。

\*・\*・\*

自分の犯した罪に、罰を受けなければならぬ。誰からのもので構わない、痛みがほしい。そんなことに意味はないと頭では理解していても、そう願わずにはいられなかった。

彼女の両親——自分には両親がいない。母は小学校に入る前に父と離婚して家を出ていき、父は高校時代に交通事故で亡くなった——も娘のりさ子も、自分に何も言わなかった。責めることもかばうこともせず、ただ悲しそうな顔で自分と陶子を見た。それが彼らの優しさだということ。はよく理解していて、だからこそその不当な優しさが自分には重く、痛かった。

——ママは、パパに怒っているんだ。りさ子のこととは前と変わらず愛している。今はよく思い出せなくなっているだけなんだよ。だからママがりさ子を大好きだった気持ちを出せるようになるまで、おじいちゃんとおばあちゃんの家で待っていて。パパが何を言っているのか、分かるか

い？

りさ子は、自分の言葉に従順にうなずいた。

——パパ、ママと仲直りするよね？ おじいちゃんとおばあちゃんのおうちに、二人で迎えに来てくれるよね？

——りさ子……。

父親と母親の間に起こった「何か」を悟り、それでも希望を捨てきれないというような表情だった。出来もしない約束はしたくない。大切な娘なのだからなおさら。

けれど自分はずるかった。りさ子に真実を告げて許しを乞うには、自分の心はあまりに弱く、その弱い心を折るには勇気が足りなかった。

——ああ、約束する。約束するから……。

一度だけ抱いた女の躰は柔らかく、自分が欲望の命じるままに伸ばした手をどこまでも抵抗なく受け容れた。抱き寄せたりさ子の躰はそれとはまるで対照的で硝子細工に似た硬さがあり、強く握れば形を変える前に砕けてしまっただった。りさ子は母親に似ている。十代の陶子もそうだった。未完成で脆弱な、それでいて無条件に愛されるべき躰。

——あたし、ここにいます。待ってるから！

りさ子は、玄関でそう叫んだ。彼女を陶子の両親の家に預け、背を向けて玄関に歩き出して自分はその声に振り返ることができなかった。怖かったのだ。ここで振り返れば、限りなく軌道を逸れそうな気がした。うんと遠くに行つて、もう二度と元の場所には戻れない、そんな予感があつた。

あと五年もすれば、りさ子も自分と神代梨沙子のように恋をするのだろうか。そしてそれを、いつまでも忘れずにいるのだろうか。それともすぐに忘れてしまうのだろうか。りさ子は母親に似ているから、後者かもしれない。

りさ子の声を振り切つて玄関をくぐり、独りで車に乗り込んだ瞬間、涙があふれてきた。膨らみきつた風船が割れるみたいに。視界を白く濁らせる涙をぬぐうために両手がふさがつてしまい、エンジンをかけることができなかった。視界が晴れ、車を走らせるころには、自分はよれよれに憔悴していた。脛が腫れて重たく、体全体が怠かつた。思考することが億劫で、自分は早く眠りたかつた。

こんなこと、どう考えても間違つている。それは痛いほ

ど分かつている。ならばどうすればよかつたのか、これからどうすればいいのか。神でも悪魔でも構わないから教えてほしいのに、答えを求めて伸ばした指先はむなしく暗闇の海を掻き分けるだけ。

考えても答えが出ないのなら、せめて樂觀的でいた方がいい。探しても何も見つからないのなら、盲目的に思い込んでいた方が苦しまない。

数えきれないほどの謝罪の先に恩赦があることを。途方もない絶望の先に新たな希望が生まれることを。

\*・\*・\*

「お帰りなさい、遠間先輩」

最近、陶子は自分をまた「先輩」と呼ぶようになった。彼女の思う通りにさせてやろうとしたが、それは次々に悪い結果を招くだけだった。陶子は自分の想像を絶する角度でどんどん壊れていった。

「ただいま、陶子」

キッチンに立つ背中に呼び掛ける。オフホワイトの薄い

ニットに、紺のフレアスカートを合わせた「いい奥さん」ふうのコーデイナート。

「今日のお夕飯はカレーなの。先輩、好きでしょう？」

彼女が振り返り、小さく首をかしげる。

「ああ。嬉しいよ」

自分が答えると、陶子とはびつき嬉しそうに微笑んだ。まるで少女のように。

陶子が笑顔のまま自分の首に腕を回す。背の低い彼女に合わせるように、自分も彼女の腰に手を置いた。

自分に彼女を突き放すことはできない。神代梨沙子との思い出も捨てられない。

もう自分を十歳の子供だとは思わなかった。しかし三十五歳の大人だとも思わなかった。今の自分をたとえるなら、まるで老衰による死を待つだけの老人だ。

過去に戻ることで、陶子はなにかを取り戻そうとしたのだろうか。

「先輩、キスして」

顔を上げて目を閉じる陶子に逆らわずに、自分は唇を寄せる。重なりが深くなるように顔を横に向けると、彼女も

それに合わせて唇を捻った。その時、触れ合っていた頬の間にわずかにできた隙間を、生温かい水の粒が流れ落ちるのを感じた。ほのかな潮の香りが、鼻先を掠めた気がした。唇を重ね、その奥にあるピロッドに似た柔らかな感触に応えながら、許してくれと願い続けた。しかし彼女の背は遠い。明るい日差し降り注ぐ中、長い髪を風にふわりとそよがせ、顔いっぱい柔らかな微笑みをたたえて、こちらに振り返った女性は、宮坂陶子であって神代梨沙子ではなかったはずなのに。

\*・\*・\*

ああ、彼女はすっかり、気が違ってしまった。

(次号に続く)

月刊缶じうす新歓号 通巻187号  
2013年3月26日発行

編集人 蒼井天優 芹沢一

発行所 広島大学文団BOX